

講演会要旨

開催日：2000年10月7日（土）午後2時30分
～午後5時30分

会場：神奈川大学人文学研究所資料室（17号館216号室）

講演者：菅原 昭氏（神奈川大学経済学部非常勤講師）

演題：「タイ国民経済への一つの接近方法——戦間期タイ国民経済形成と農村市場」

本報告は、タイ国民経済形成期における周縁部地方市場あるいは農村市場の様態を明らかにすることで、発展途上国の国民経済形成の一端を開示することを試みたものである。

まず、タイにおいて国民経済という概念を使用するにあたり、その定義を提示した。一つには、国民経済成立の前提となる国民国家の成立（四つの要件）である。二つ目は、各地域間の経済統合あるいは市場統合の条件となる鉄道を中心とした社会資本整備の推進と、関連する基礎的産業であるセメント産業の輸入代替工業化の達成、そして製造業発展の潜在的可能性を示す機械修理部門における事業体の成長などである。以上のことをもって、タイが1930年代に国民経済成立の根拠とした。そして、ここでは国民経済の内実に向ける接近方法の一つとして、国民経済の末端市場でもあり、最大の担い手である農民が深く関わる農村市場がどのような様相を呈していたのかを考察の対象に選択した。ただ、課題とした農村市場の実態については、資料上の制約から戦間期を通年で考察することが不可能なために、1930年代に二回に渡り実施された農村調査報告書を加工分析し検証した。

報告の結論として、米は各地域間の鉄道移出商品としてのみならず農村市場における流通商品としても重要な商品の地位を占めていることを明示した。とりわけ鉄道による最大の移出地域である東北部の米は、二つの顔を持っているといっても

よい。糯米の内向きの顔と粳米の外向きの顔である。米の総生産量と域内消費、そして域内流通の中心は糯米である。他方、鉄道建設効果による換金作物として急速に栽培が普及し、飛躍的な移出量の増大をもたらしたのが粳米である。米の価格形成においても域内需給を軸に安定した価格推移を示す糯米と、世界市場価格などの域外（海外）需要因に連動した価格推移を示す粳米というように需給関係が二重に交錯している。ただし、後者はナコーンラーチャシーマー周辺に限定されており、東北部農村市場の柱が糯米であることに変わりはない。なぜなら東北部の米市場は、無機質な量的需給要因だけでなく、「糯米を常食にする食文化」という文化的要因も重要な市場規定要因として市場規定要因として市場基盤を支えているからである。（文責：菅原 昭）